

# 平成 30 年度さくらねこ無料不妊手術事業

## 行政枠・団体枠多頭飼育救済事後調査アンケート 集計結果

### さくらねこ無料不妊手術事業とは

どうぶつ基金の「さくらねこ無料不妊手術事業」はノラ猫や多頭飼育の猫に対し不妊手術を行い、猫への苦情や、殺処分数の減少に寄与する活動です。

平成 30 年度は 1,663 名の個人(一般枠)、25 の団体、81 の行政と協働し、約2万頭のさくらねこ無料不妊手術を実施しました。

### 1. アンケート概要

平成 30 年度に「さくらねこ無料不妊手術事業」に多頭飼育崩壊現場への不妊手術支援を申請し、事業を完了した協働ボランティア(団体枠および行政枠)に事後調査アンケートを実施しました。

**団体枠とは:** 行政枠に属さない団体、NPO 法人、自治会

団体枠登録対象者

団体枠 A=【公益財団法人、公益社団法人、NPO 法人、認定 NPO 法人、一般財団法人、一般社団法人】のうち、どうぶつ基金の地域相談窓口として紹介される事、相談者に対応することに同意した団体

団体枠 B=学校法人、自治会連合会、自治会(チケット使用対象地域は自治会や学校の管轄内の猫に限る)

※地方公共団体が運営している施設(公園等)の管理を委託されている指定管理者は行政枠にあたるために含まれない。

**行政枠とは:** 行政(地方公共団体)および準ずる団体

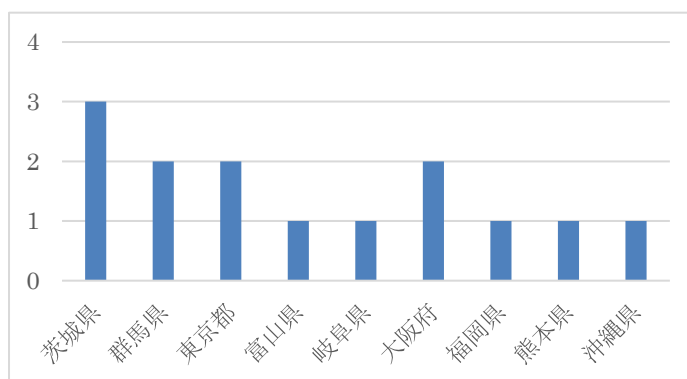
公園管理事務局等、行政が管理する施設の管理者や、大学等教育機関も行政枠の対象

- ・平成 30 年度さくらねこ無料不妊手術 多頭飼育救済実施数 14 件
- ・アンケート有効回答数 14 件

### 2. 都道府県別件数

茨城県が 3 件で最多でした。

続いて群馬県、東京都、大阪府でそれぞれ 2 件、残り 5 件は別々の県で実施しました。



### 3. 申請組織の種別

申請組織の種別は	票数	%
行政枠	11	79%
団体枠	3	21%

昨年度までの多頭飼育救済事業は、ほぼ全てが団体ないし個人ボランティアの申請によるものでしたが、今年度は行政からの申請が11件に急増しました。

### 4. 配布チケット数について

30年度に配布を受けたチケット数	票数	%
1～10	2	14%
11～20	4	28%
21～30	3	22%
31～50	3	22%
51～70	2	14%
71以上	0	0%

配布されたチケットの使用率	票数	%
100%	6	43%
80～99%	2	14%
60～79%	5	36%
40～59%	1	7%
20～39%	0	0%
0～19%	0	0%

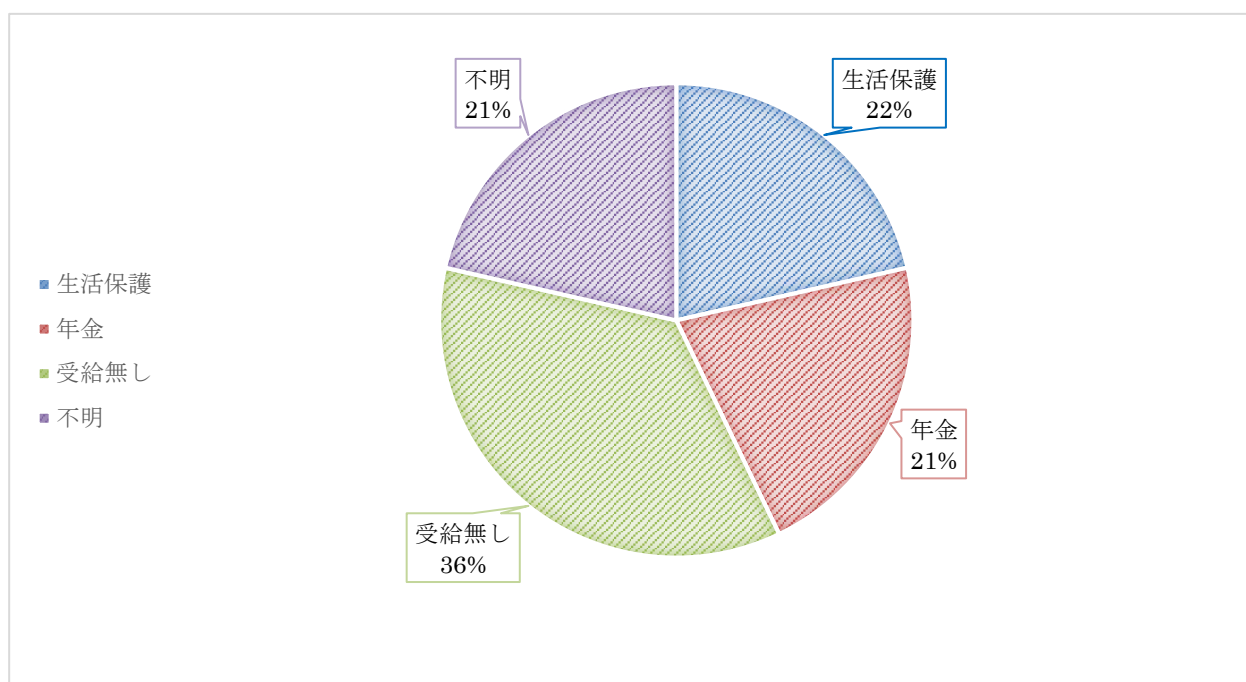
43%の団体が100%の使用率、93%の団体が60%以上の使用率でした。

### 5. 多頭飼育状態に陥った原因

多頭飼育状態に陥った原因	票数	%
室内で繁殖を繰り返して増えた	13	93%
無計画にノラネコなどを保護したりする収集家タイプ (アニマルホーダー)	1	7%

## 6. 多頭飼い現場当事者の社会保障等の受給状況

回答	票数	%
生活保護	3	21%
年金	3	21%
受給無し	5	36%
不明	3	21%



当事者の21%が生活保護受給者でした。多頭飼育状態に陥る前段階での生活保護担当者(ケースワーカー)の介入が望まれます。

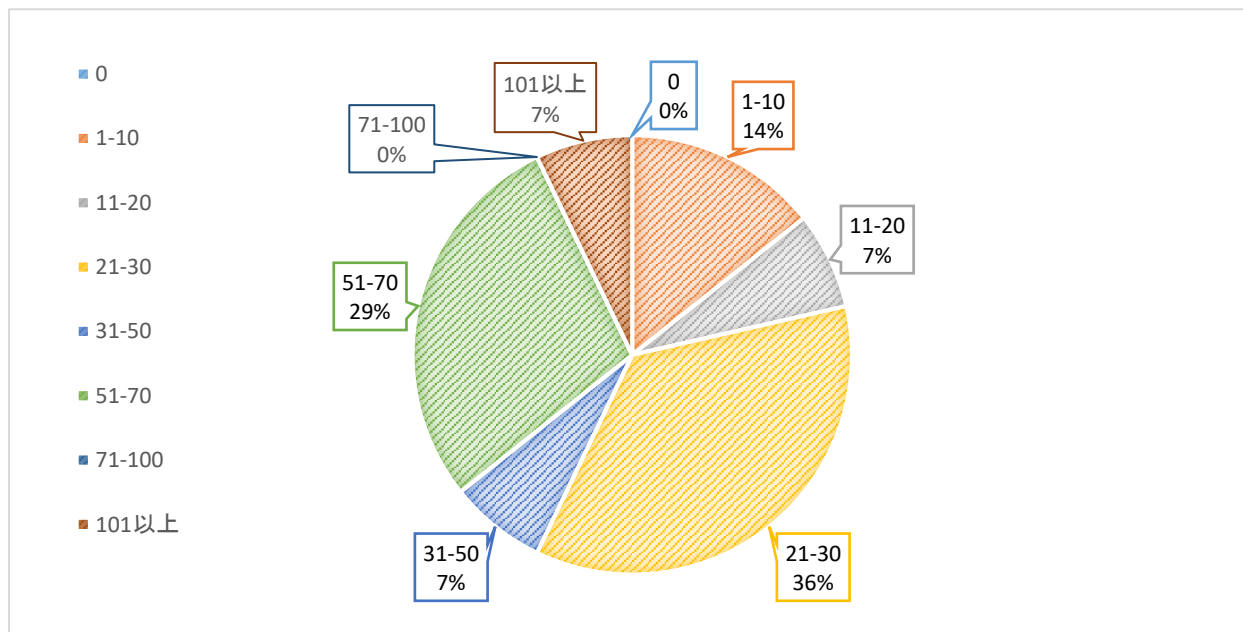
## 7. 対象猫の飼育状況

対象猫は	票数	%
完全室内飼育	11	79%
室内と外を出入りしている	3	21%

## 8. 手術前の猫の総数

申請時(手術前)の多頭飼い現場の猫の総数	票数	%
1～10	2	14%
11～20	1	7%
21～30	5	36%
31～50	1	7%
51～70	4	29%
71～100	0	0%
101 以上	1	7%

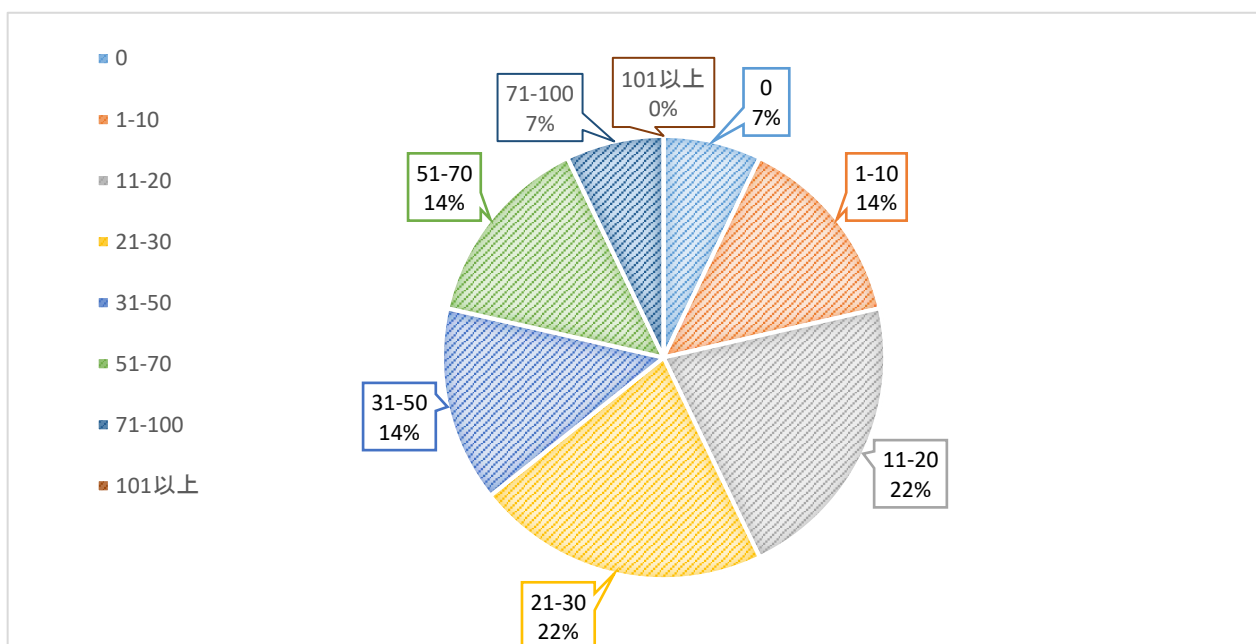
手術前に 1 箇所の多頭飼い現場にいた猫の数の平均は、37 頭でした。



## 9. 手術後の猫の総数

手術実施後(報告時点)の多頭飼い現場の猫の総数	票数	%
0	1	7%
1~10	2	14%
11~20	3	22%
21~30	3	22%
31~50	2	14%
51~70	2	14%
71~100	1	7%
101以上	0	0%

手術後に1箇所の多頭飼い現場に残った猫の数の平均は、約27頭でした。



## 10. 不妊手術の状況

全頭不妊手術実施できましたか	票数	%
はい	9	64%
いいえ	5	36%

不妊手術を実施できなかったのは主に仔猫で、実施後に譲渡ないし手術を実施予定です。その他、病气持ち、奇形など特殊な理由で手術を行えなかった例が報告された他、捕獲ができなかった猫が全体で2頭いたことが報告されています。

## 11. 手術後の定期訪問

手術実施後 定期的に当事者を訪問していますか	票数	%
はい	7	50%
いいえ	7	50%

## 12. ピックアップコメント

### 【多頭飼育に陥るまでの経緯】

●初めは2匹飼っており、子供ができ増えてしまった。2匹は不妊・去勢手術をしたが、他もしなくてはと思っているうちにどんどん数が増えていってしまい、手に負えなくなってしまった。

●飼い猫を1頭飼養していたところ、数年前に野良猫1匹をかわいそうなり保護し飼養を始めた。当初は室内外関係なく世話していたが、餌をあげ始めたことをきっかけに周辺から子猫を連れてくるようになった。しばらくして世話をしていた子猫が野生鳥獣(主にカラス)に襲われるようになり死んでしまう個体が数十頭出てきたため、それから全頭室内で世話をすることとなった。(子猫が襲われる時点ですでに出産を繰り返していて相当数周辺で生活していた。これまでに累計30頭ほど死体を処理したとのこと)

●数年前に両親が死亡、その後自身もガンなどの手術をしたころから精神的に動物の保護や餌やりをするようになり、繁殖が繰り返され多頭飼育崩壊に至った。2年ほど前、市役所等に周辺住民から猫に関して苦情が出ていた。当時は本人と直接面会ができなかったことや、自宅周辺で猫が確認できなかった。昨年、本人と対面し自宅である現場の調査を行い、80頭以上の猫がいることを確認した。

●近所の子供が子猫を連れてきて飼いだしたのがきっかけ。避妊手術をしていなかった為10頭以上に増え、近所からの苦情により現在の場所に引越しをした。10年程度で約12頭を飼っていたが1頭ずつ不妊手術を施すもここ1~2年の間で本人の保護や近隣から捨てられた猫が新たに増え不妊手術が追い付かなくなり現在の状況に至る。

### 【手術後の対象場所や当事者(飼い主)の状況の変化】

●一斉手術のタイミングで畳を入れ替えたので、若干の臭いの軽減を図ることができた。また、全頭の手術が終わってから当事者と福祉機関をつなげるために、NPOとして動きました。現在は、生活支援に、社会福祉協議会が関わり、当事者の父親のことに地域包括支援センターが関わってくれています。

●生殖活動が無くなり、出産もしないため猫が穏やかになった。頭数は減っていないが室内は落ち着き、管理することが容易になった。

●マーキングがなくなり消毒もできるようになり家の中の匂いが減ってよかったそうです。

●手術と合わせて、ボランティア及び当事者により劣悪だった環境も改善させたことから、猫及び当事者の住環境が大きく改善された。

### 【多頭飼育崩壊に対し、どのような予防的な取り組みが有効だと思いますか】

●動物愛護の担当部署だけでは多頭飼育崩壊現場の情報は集まってこないため、他部署（社会福祉課等）や地域で活動するボランティア等と積極的に交流する必要がある。

●多頭飼育に陥る原因の一つは、不妊手術費用が高額であるため手術が進まず繁殖が繰り返されていることにある。そのため、手術費用の助成金制度の整備を進めること。また、地域ネットワークの活用等で、多頭飼育者を把握し不妊手術を促していくこと。

●保健所に相談すると引き取りを持ち掛けられると思って相談しない飼い主もいると思われる。未手術の猫にエサやりをしているとどうなってしまうのかをさらに知ってもらう必要があると思う。

●家庭訪問を実施する福祉機関と連携をはかり、単頭飼育からでも不妊手術を実施できるような体制を構築すること。

### 【自己評価・反省点】

●数が多いため、市内にある最寄りの公共施設の一室を借り病院の届け出を出し設置、ボランティア数名と担当市職員1名が捕獲し、搬送、その後リリースした。医師も病気や体の状態を確認し、必要な処置を施し、リリース場所は酷い状態だったが、ボランティアが寄付を募り、清掃業者へ委託し、清掃し、清潔の状態へリリースすることができ、衛生面でも現在できる最適な状態だった。その後も、数回訪問し、猫の居場所の状態や健康状態、飼い主の飼育方法など観察・指導している。

●当事者は外にいる猫にエサを与えることはどうしてもやめられないようであるが、手術によって、一代限りの管理が可能となり、近隣住民への理解につなげることができた。

●ボランティアの協力のおかげで、猫を保護することができた。どうぶつ基金のチケットの配布を受けることで、ボランティアが実施する不妊去勢手術費の負担を一部でも軽減することができた。今後もボランティアをはじめとした関係者との連携を図りながら、多頭飼育崩壊への対応に当たりたい。

## 12. 総括

●昨年度(平成 29 年度)の多頭飼育救済事業は 3 件であったのに対し、今年度は 14 件と大幅に増加しました。さらに、平成 27 年度から 29 年度までの 3 年間に実施した多頭飼育救済事業合計 22 件のうち、行政から申請を受けたものが 1 件のみであったのに対し、今年度は 1 年間で実施した合計 14 件のうち、8 割近い 11 件が行政による申請でした。行政の多頭飼育崩壊に対する関心の高まり、そして積極的な介入事例の増加がはっきりと示されています。

●今年度、団体枠で多頭飼育救済事業を実施した 3 団体全てから、行政による更に積極的な介入を期待する声や、行政との協力が不可欠であるという声が寄せられました。先に実施した団体枠のアンケートでも、「過去 1 年間、多頭飼育崩壊の相談を受けたことがありましたか」との質問に、23 団体中 10 団体が「はい」と回答し、野良猫や地域猫のみならず、多頭飼育崩壊が主要なさくらねこ無料不妊手術事業の対象となっていることが示されていました。個人宅が対象となる多頭飼育崩壊に対しては、行政抜きでの介入は深刻なトラブルに繋がる危険もあり、行政との連携強化が望まれます。今年度、11 カ所もの行政が多頭飼育救済事業を主導したという事実は、今後、他の地域の行政が積極姿勢に転じることを後押しする好材料となりえる、大きな成果であると言えます。

●「どうして多頭飼育状態を知りましたか」という質問では、近隣住民からの相談、ボランティアからの相談、本人からの相談、役所からの情報、という 4 類型に回答が分かれました。近隣住民からの相談が 4 件、ボランティアからの相談が 4 件、本人からの相談が 3 件、役所からの情報が 3 件とばらつきが見られますが、本人からの相談と回答した 3 件のうち、2 件は団体枠での申請事業でした。残る 1 件は行政枠ですが、「不妊去勢を小額もしくは無料で行えることを知人から聞き、市へ相談を持ちかけた」との回答のとおり、不妊去勢手術に詳しい知人が身近にいたことがきっかけで行政への相談に至っています。この結果から、多頭飼育崩壊に陥っている人々は、最初から行政に頼るのではなく、まず身近な人やボランティアに相談する傾向があることが伺えます。身近な相談役としてのボランティアと、スムーズな介入や諸制度を活用した側面支援を行うことができる行政がより緊密に連携できるようになれば、より効果的、あるいはより早期の介入が可能になるでしょう。

●手術前に多頭飼育現場にいた猫の数は、14 件合計で 518 頭でした。そのうち、不妊去勢手術の実施後に他者に保護・譲渡された猫の頭数は 38 頭で、全体の 7%に留まっています。死亡した数頭を除いて、ボランティア等が一時保護し里親募集を行っている例も多いものの、手術後にも 7 割以上の 382 頭が多頭飼育現場に残っています。かわいそうだからと捨て猫を保護したり、野良猫に餌やりをしたことをきっかけに猫が増えた事例も多い中、手術を行った現場で再び猫が増えることがないように、継続的な支援や見守りを行うことが望まれます。手術後、ボランティアや職員が環境改善や適正飼養のための指導を行っている事例も複数ありますが、「手術実施後 定期的に当事者を訪問していますか」との質問には、「いいえ」の回答が半数に上りました。多頭飼育崩壊の事例が増加する中、行政側での仕組みづくり、恒常的な地域のボランティアの巻き込みとネットワークづくりなど、手術後の指導や見守りも含めた支援体制の構築が望まれます。